

「ハレとケ」 通信

第6号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (6) 「鵜足津福祉会」

知的障害者更生施設 高瀬荘
マイルドハート21
マイルドハート坂出

「ハレとケ」のある

遊びかた・暮らしかた(6)

【新茶を楽しむ／八十八夜】

花ある数寄屋(6)

「雨落ち」

中津万象園

「花の歳時記」(6) ボタン

かさねの色(6)「杜若」



平成22年3月発行

表紙写真：4月末。山ではムベの花が満開となる。(昨年、雲辺寺にて)

「鵜足津福祉会」

知的障害者生活施設 高瀬荘
〒401-0221 愛知県大府市坂田 他

手元に、「支え合い 共に生きる」と題された一冊の文集がある。

宇多津町に生まれ、香川県を代表する社会福祉法人である『鵜足津福祉会』の三〇年記念誌だ。

そこに記された数々の言葉は、理屈を超えて、支え合い共に生きることの温かさ、優しさを私たちの心に真摯に訴える。…今回は、その鵜足津福祉会の建物に纏わる物語を紹介致します。

“福祉”という言葉で、皆さまはどんな

ことを思い浮かべるだろうか。高齢者の介護？ 障害者の自立？ 外国人労働者の受け入れ？…社会福祉といえは一般には

“老人福祉”“障害者（障がい者）福祉”“児童福祉”“母子福祉”を指すものであるが、実際にその仕組み、現状、課題などを把握できているのかと言われれば、マスコミ等で流される情報に限られがちで、出来

ているとは言い難い。むしろ、それ以外の情報には接することなく、そういった“福祉”に目を向ける機会すら持たないまま日々を過ごす人も意外に多いのではないかと感じることもある。

“福祉”という考え方を歴史的な流れから見れば、日本に於いては聖徳太子の頃、貧民救済として端を発し、仏教の影響と共に相互扶助や僧侶による救済が行われるようになり、キリスト教国では古くよ

り慈善事業として捉えられてきた。

つまり、もともとは慈善的・恩賜的な色彩が強く、“助ける・助けられるもの”という関係として成り立っていたということが出来る。明治時代に『恤救規則』という法律が定められたものの、まだ“福祉”は個人として解決すべき問題である”という考え方が強く、社会全体として取り組むという姿勢は少なかった。

日本で本格的に取り組みが進められ、福祉三法が定められたのは戦後のこと。この福祉三法は、どちらかと言えはそのときの時勢（戦死による遺族の生活保障、失業者の増加、傷痍軍人の社会復帰など）を反映したものであった。

その後一九六〇年代に現在の知的障害者福祉法、老人福祉法、現在の母子及び寡婦福祉法が制定され、併せて「福祉六法」となり、阪神大震災を契機に介護保

険法が定められるなど、社会情勢・必要性を取り入れつつ“福祉”は発展していく。

現理事長（創立者）小松守氏が鵜足津福祉会創立を目指し準備を始めたのは、昭和51年（一九七六年）。当時、33歳の若さである。「なぜ福祉を始めよう？」と質問すると、「人の役に立つことがしたかった」と言う。「人の役に立ちたい」とはいえ、当時の世相を考えれば福祉というのはまだまだ馴染みのない世界ではなかったのだろうか。

「最初は、私たち両親が働いているのに、祖父母がいたせいで娘が保育所に入れなかったことから、保育所をつくってやろう」と思っていた。自分たちのように困っている人はいるはずだ、と考えたから。だが、既に別の人が宇多津町に保育所を計画中だったことで、それは断念。でも、とにかく人の役に立つ、人びとの生活の支えになることをしたい、と…。そう考えていたところ、宇多津町の高齢者人口の比率が、他町に比べ高いことに気付く。

「その頃、中讃には、特別養護老人ホームというものは少なかった。このままでは、宇多津町に住むお年寄りは、安心して暮らすことは出来ない。じゃあ、自分が作ってやろう、と思った。」小松氏は、県の職員

の助言を受けつつ、この信念を推し進めていく。

なぜ、『特別養護老人ホーム』が中讃・西讃には少なかったのか？

その理由は、想像するに、この施設の持つ性質にあったように思う。『特別養護老人ホーム』は老人福祉法を根拠とする施設であるが（現在は介護法の認定も受ける）、その特長として、“入所できるものは低所得者に限らない”ということがある。当時、画期的な考え方であり高い評価を受けたものの、まだ地方ではその必要性を感覚として受け入れている人は少なかった。つまり、“家の年寄りを施設に預けるのは、姥捨て山に捨てに行くようなもの”という根強い罪悪感があったのだ。

この肌感覚とも言うべきものが、小松氏の最初の施設『特別養護老人ホーム寿楽荘』の新築時にも“地元住民の反対”という形で現れる。会の掲げる“支え合い”という理念は、なかなか理解されなかった。

そして、様々な経緯を経て『寿楽荘』が完成。そうすると、反対していた人びとがお年寄りを連れてやってき、施設はたちまち満室となる。

「最初、施設に対しアレルギーを感じていた人も、結果的にはやってきた。という

のは、実際にはそういった施設でのサービスは、家庭ではできないことだったし、社会的に必要とされていたから。当時の一般的な住宅では、風呂や便所は母屋から離されていることが多かった。風呂は火事になるといけないから離し、便所は臭いから離す。じゃあ、その離れたところにある風呂や便所に、寝たきりに近いお年寄りを連れて行けるのか？連れて行けたとして、和式便所を使うのか？五右衛門風呂のような風呂、また、段差の大きい風呂に入れられるか？…考えてみれば分かるけれども、そんなことは女性の力では無理でしょう。どんなに行き届いたお世話をしてあげたくても、物理的に限界がある。」

一度の入浴では綺麗にならない。それを数日かけて清潔にし、食事も温かいものを食べさせる。入居者にとつて、施設に働く人たちは大げさでなく後光が差すように輝いて見えたことだろう。「そのときの『ありがとう』と手を合わせるようにして言ってくれる言葉が、それまでの苦労や心労を吹き飛ばしてくれた。」と小松氏は思い起す。

そして、身近に施設が出来たことが、住民達の意識も変える。

「これまでは施設に預ける…というところめたいことだった。だから、地元の施設には入れず、離れたところに入れる。だが、“施設に入れば清潔にしてもらえる、食事もおいしく、快適な、あらゆる意味で安心できる暮らしをさせてもらえろ”という認識が浸透すれば、罪悪感は払拭され、できるだけ訪ねて行きやすい、近

くの施設に入れるようになる。そうすることは結果的にお年寄りの幸せにつながるし、“支え合い生きる”ということにもつながる。」小松氏の信念の通り、施設の必要性は社会に認められていく。

そして、福祉において重要な節目の年がやってくる。一九八一年の「国際障害者年」である。テーマは「完全参加と平等」とされ、障害に対する福祉の考え方を、「助けるもの」から「自立を支援するもの」へと大きくシフトしていくものであった。一九八八年から一九九二年の10年間を「国連障害者の10年」とし、続く二〇〇二年までの10年を「アジア太平洋地域障害者の10年」として本格的な取り組みをし定着を目指す、というのが主な要諦である。

この流れの中、鶴足津福祉会は県より依頼を受け、「香川県の西の拠点となる障

害者施設」として昭和六二年（一九八七年）、「知的障害者更生施設高瀬荘」を定員50名にて開設。続いて「知的障害者授産施設高瀬荘」を平成元年に同じく定員50名で開設。その活動の幅、そして支え合うことの幅を拡げていく。

その後、平成4年には特別養護老人ホーム寿楽荘デイサービスセンター、在宅介護支援センター事業、平成5年には同じくショートステイ事業、介護老人保健施設ライトハートいきいき荘・老人デイサービスセンター、老人介護支援センター事業開始、平成6年 ケアハウスマイルドハート21（県内唯一の100ベッドの規模）開設、平成8年 身体障害者養護施設みとよ荘開設、ケアハウスマイルドハート坂出開設、平成11年 ケアハウスマイルドハート丸亀開設…と現在に至るまでに十二箇所の事業所を開設、地域の福祉の拠点として次々に活動を行っていく。「十五年間とはにかく走り続けた」という成長ぶりだが、その事業規模を拡大することについても、小松氏は信念を持っている。

「事業を発展させ、大きくすることで、従業員は安心し、収入面や社会的な評価も安定する。また、組織が大きくなることで、出世の道も拓けてくる。組織が小さいと、能力があつてもどうしても頭打ちに

ケアハウスマイルドハート坂出



ケアハウスマイルドハート宇多津





上段：高瀬荘玄関ホール天井は、仁尾の太陽博の記念。当時、斬新なデザインだった。
中段：利用者の作った石タイル。
下段：家族がボランティアで整備している中庭。

なってしまうけれど、組織が大きければ必要な人材も増える訳だから。一族の間や古参社員以外にも努力次第で道が開ける。そのための発展を志してきた。」それは小松氏のすべての事業、考えを貫く「支え合い」にも通じる。

さて、この鶴足津福祉会であるが、当社が関わった建物は高瀬荘、マイルドハート21、マイルドハート坂出、そして現在建築中のケアホーム宇多津の4棟が代表的なものである。（修繕等のメンテナンスは含まない）

「すべて当社で…」と言えないのは寂しいことではあるけれど、小松氏の工事の発注に対する姿勢は一貫して変わらない。「工事中、工事後に破綻することなく、信頼できる会社であり、もっとも妥当な価

格を提示できる会社に任せたい」。それが、小松氏の工事発注に係る信念である。今は、補助金を使用する事業については施設の規模・金額によつて「何社以上の指名による入札を行う」という規定が定められているけれども、根底を流れる思想はそれと同じものだろう。つまり、「補助金を交付されて行う事業である以上、その遂行は公明正大でなければならぬ。また、リスクがあつてはならない。」ということである。

建設会社によつて、「特命」ということはお客さまからの最高の信頼の証である。お客さまの信頼に応え、本当の顧客満足を追求するという根本的な使命から見れば、自分を常に厳しく律し、品質・価格・デザイン・提案力等で絶えずレベルアップを図らねばならないという点において、

“相対的でなく絶対的であらねばならない”という身の引き締まるような恐ろしさはあるものの、やはり、そこからくる感動、信頼に伝えたいという熱い思いは他のものには代え難い。しかし、福祉法人等の補助金交付による事業の場合、その指名に常に入り続けるということ自体が、その「特命」ということと近い信頼をいただいているということではないだろうか？

そう考えると、約30年にわたり鶴足津福祉会の指名に入り続けてきたことは、誇りに思つて良いように感じる。

では、最後にそれら、当社が建設工事を請け負った施設の中から、いくつか建設に係るエピソードをご紹介します。

まず、建設現場に関わつたすべての監督が共通して口を揃えることは、“小松理事長が現場へ頻繁に顔を見せる”ことである。小松氏自身、「現場監督みたいなものや」と笑うけれども、事実、そのくらいの熱心さで現場を訪れる。そして、日常の介護等の業務の中から気が付いたことのみならず、工事現場にて浮かんだアイデアをも次々と形にしている。たとえば、“障害者や老人などの利用者の多い福祉施設の戸は、片引き戸であるべきだ”と最初に設計者に提案したのも小松氏なら、“介護の一巡の作業のなかで、できるだけ利用者に恐

怖心を与えてはいけない”と、入浴の際に利用者を下ろすのではなく湯船等を動かすことを提案したのも小松氏である。また、竣工検査の際には自ら下げ振りと水平器を持って現場を訪れ、その完成に落ち度はないかを見極めた。

マイルドハート21の現場にはこんなエピソードもある。実は、この施設の玄関を飾る石タイルは、入所者及びスタッフの手作りである。それぞれの施設で大切に作られたタイルが現場へ運ばれ、それで施設を飾る。そのことは利用者の安全、楽しみ、幸せを祈るような作業ではなかっただろうか？同じようにそういった作品は高瀬荘の堀、寿楽荘の玄関でも使われ、心を込めたそれらの装飾は、変わらず入所者の目を楽しませ癒していることだろう。

建物は、人の命・安全を守る「器」である。そして、そこを利用するひとたちの思いや時間などの目に見えない貴重な諸々を受け止め積み重ねていく「器」でもある。（神社や寺の独特の雰囲気はそういったものに由来するのではないだろうか？）

そのことの持つ責任の重さ、そして誇らしさを改めて認識し、現在建築中のケアホーム宇多津を完成させねば…そう感じた「物語のある建築」であつた。

鵜足津福祉会のあゆみ



作業所でイチゴを水耕栽培し、そのイチゴがデイサービスの利用者を喜ばせる。他にも様々な作業、計画が行われているが、それらの間にも「支え合い」の精神が息づいている。

昭和52年10月	社会福祉法人鵜足津福祉会設立認可(厚生省社第850号)
昭和53年3月	特別養護老人ホーム寿楽荘開設
昭和62年4月	知的障害者更生施設高瀬荘開設
平成元年5月	知的障害者授産施設高瀬荘開設
平成5年4月	老人保健施設ライトハートいきいき荘開設
	老人デイサービスセンター・老人介護支援センター事業開始
平成6年9月	ケアハウス・マイルドハート21開設
平成8年6月	身体障害者療護施設みとよ荘開設
	知的障害者通所更生施設高瀬荘開設
平成8年10月	身体障害者デイサービスセンターみとよ荘事業開始
平成9年9月	ケアハウス・マイルドハート坂出開設
平成9年10月	身体障害者デイサービスセンター坂出事業開始
平成11年4月	ケアハウス・マイルドハート丸亀開設
	老人デイサービスセンター丸亀事業開始
	身体障害者デイサービスセンター丸亀事業開始
平成12年4月	いきいき荘生きがい活動支援通所事業開始
	マイルドハート丸亀生きがい活動支援通所事業開始
平成12年4月	介護保険法施行により以下の事業開始
	介護老人福祉施設寿楽荘
	・寿楽荘短期入所生活介護
	介護老人保健施設いきいき荘
	・いきいき荘短期入所療養介護
	・デイサービスセンターいきいき荘(通所介護)
	・通所リハビリテーションいきいき荘
	・いきいき荘居宅介護支援事業所
	・マイルドハート丸亀居宅介護支援事業所
	・デイサービスセンター丸亀(通所介護)
	・丸亀訪問入浴サービス事業
平成12年7月	マイルドハート坂出居宅介護支援事業所
平成14年5月	ケアサービスセンター今津(訪問介護)
平成15年4月	障害者生活支援センター結(ゆい)事業開始
平成15年6月	身体障害者通所療護施設みとよ荘事業開始
平成15年11月	特別養護老人ホーム今津荘・老人介護支援センター今津荘事業開始
平成16年4月	知的障害者通所授産施設かりん園開設
平成16年5月	知的障害者更生施設高瀬荘増築工事竣工
平成16年9月	知的障害者授産施設高瀬荘授産工場新築工事着工
	上高瀬グループホーム蘭新築工事着工
平成16年10月	マイルドハート21特定施設入所者生活介護事業開始
平成16年12月	知的障害者更生施設高瀬荘大規模修繕工事着工
平成17年5月	上高瀬グループホーム蘭新築工事竣工
平成17年6月	知的障害者更生施設高瀬荘大規模修繕工事竣工
平成17年7月	上高瀬グループホーム蘭定員4名にて事業開始
	知的障害者更生施設高瀬荘定員80名にて事業開始
平成17年10月	知的障害者授産施設高瀬荘授産工場新築工事竣工
平成17年11月	グループホーム宇多津新築工事着工
平成17年12月	障害者支援施設土器川タウン新築工事着工
平成18年1月	7町(高瀬山本・三野・豊中・詫間・仁尾・財田)合併により「三豊市」発足
平成18年3月	3町(満濃・仲南・琴南)合併により「まんのう町」発足
	グループホーム宇多津新築工事竣工
平成18年4月	マイルドハート21介護予防特定施設入居者生活介護事業開始
平成18年6月	グループホーム宇多津定員4名にて事業開始
平成18年9月	障害者支援施設土器川タウン新築工事竣工
平成18年10月	障害者支援施設土器川タウン施設入所支援定員50名にて事業開始
	障害者支援施設土器川タウン生活介護定員70名にて事業開始
	土器川タウン相談支援事業所事業開始
平成20年7月	エコランド鵜足津(就労支援B型)定員20名にて事業開始
	ライトハイツ鵜足津定員6名にて事業開始(グループホーム)
平成21年4月	グループホーム宇多津オリーブ定員7名にて事業開始
平成21年7月	特別養護老人ホームマイルドハート高円寺定員130名にて開設
	特別支援施設マイルドハート高円寺定員10名にて開設

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(6)

【新茶を楽しむ／八十八夜】

「夏も近づくと八十八夜・・・」。誰もが必ず一度は口ずさんだことのあるこの歌。陽気なリズムからは、青々とした茶畑に、赤い襷とかすり姿の茶摘み娘さんが、いきいきと茶を摘む姿が目に見えそうです。

歌にもあるように、茶摘みの時期といえは八十八夜を連想しますが、八十八夜とはいったいどのような日なのでしょう。

八十八夜とは、雑節の一つで、立春から数えて八十八日目の日といい、毎年五月二日頃にあたります。「八十八夜の別れ霜」という言葉があるように、この頃から霜が降りなくなり、農家では稲の種まきや茶摘みが始まります。八十八夜の日に摘んだ茶は上等なものといわれ、この日にお茶を飲むと長生きするとも言われています。

しかし実際の茶摘の時期は八十八夜だけではありません。お茶の木は生命力が強く、葉を摘んでも、また新たに新芽が伸びてくるため、茶摘は一年に三回ほど行われます。

四月下旬～五月下旬に、その年初めて萌え出た新芽からつくられる一番茶が、新茶と呼ばれ、秋から春にかけて蓄えられた栄養がたくさん含まれた『最も香味豊かなお茶』とされています。次に六月中旬～七月上旬に出た新芽でつくられるものが二番茶。その後、七月中旬～八月下旬に摘んだものが三番茶と続きますが、産地によって、二番茶で終わるところもあれば、温暖な地域では、秋にも茶摘を行うところもあります。八十八夜にあたる五月二日頃に茶摘が行われるのは、だいたに関西あたりになるようです。

「お茶」とひとことで言っても、思い浮かべる「お茶」は人それぞれ違うはずです。皆さんのお茶を思い浮かべましたか？

お茶にはたくさん種類がありますが、どのお茶も同じ木からできていることをご存知ですか。栽培方法や加工方法の違いによって色や味は異なりますが、紅茶やウーロン茶も含め、「お茶」はどれも同じ茶の木からつくられているのです。少しだけお茶の種類をご紹介します。

◆お茶の種類と特徴◆

碾茶(てんちゃ) → 抹茶	茶園に覆いをかぶせて日光を遮って育てた新芽を蒸した後、揉まずに乾燥させてつくる。これを石臼で挽いたものが抹茶。
玉露	碾茶同様、覆いをかぶせて育てた新芽を、蒸して揉みながら乾燥させてつくる。ふくよかな香りとまろやかな旨みをもつ最高級のお茶。
かりがね(茎茶)	玉露や煎茶の製造工程の中で分類された、茎の部分が入ったお茶。玉露のかりがねは味も玉露に近く、比較的値段が安いことから人気がある。
煎茶	日光を浴びた茶園で新芽を摘んで、蒸した後、揉みながら乾燥させてつくる。さわやかな香りと上品な渋みのある味わい。
ほうじ茶(焙じ茶)	下級の煎茶やかりがねを強火で炒って、香ばしいにおいを引き出したお茶。香ばしい香りと後味のサッパリ感が持ち味。食事の時や寝る前に最適。
玄米茶	下級の煎茶やかりがねによく炒った玄米を混ぜたお茶。緑茶の甘味と、玄米の香ばしいにおいが絶妙。
粉茶	玉露・煎茶の製造過程の中で分類された、粉の部分の入ったお茶。さっぱりとした渋みが特徴。お寿司屋さんでおなじみのお茶。

毎年五月頃になると、お店に新茶の試飲コーナーができます。新茶の香りに誘われて、お好みのひと品を見つけてみてはいかがでしょうか。ちなみに、試飲は、目も鼻も冴えている午前中に行うのが良いようです。

【煎茶の正しい淹れ方】

一、お湯を沸かします。水道水の場合はカルキ臭を消すために、沸騰後も二、三分は沸かし続けます。七〇～八〇度に冷ましてから、人数分の茶碗にお湯を注ぎます。

二、急須に茶葉をひとりあたり茶さじ一杯分入れます。

三、茶碗のお湯を急須に注ぎかえてふたをし、一、二分蒸らしてから、濃さが均一になるように茶碗に回し注ぎます。最後の一滴まで絞り切ってお召し上がり下さい。

※二杯目からは、お湯が茶葉にしみこんでいるので、一杯目よりもお湯の温度を高くし、待つ時間も短めにすることでおしく飲むことができます。

【状況に適したお茶選び】

●仕事・勉強の合間 — 抹茶・玉露 上級煎茶
●スポーツの前 — 玉露・上級煎茶・ほうじ茶

「汗を流した後には、ほうじ茶などたっぶり飲めるお茶がおすすめ。」

●眠気・酔いを醒す — 抹茶・玉露・上級煎茶
●食後 — 中、上級煎茶・粉茶

「食後には虫菌の増殖を抑え、食中毒を予防するカテキンが多く含まれている中、上級煎茶がおすすめです。」

●寝る前 — ほうじ茶
「寝る前にはカフェインの少ないほうじ茶が無難。」

●空腹時 — ほうじ茶
「濃いお茶は胃を刺激するので、カフェインが少なく軽い口当たりのほうじ茶が向いている。」



花ある数寄屋（6）

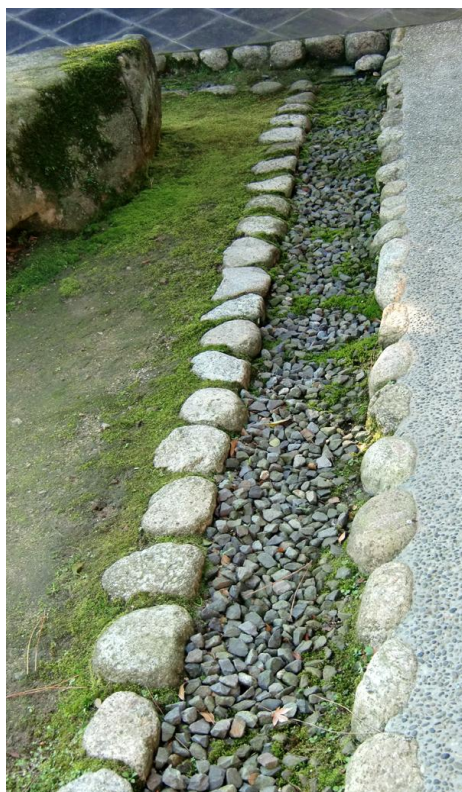
わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間。品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、数寄屋の魅力をご紹介します。

「雨落ち」



右：一文字に葺いた瓦屋根を美しく見せるために、屋根の途中に樋を設けている。

下二点：切石を使えば「真」、ゴロっとした石を使えば「行・草」に。
ここにも敷石で見たのと同じ日本人の細やかな美意識が。



雨の日、屋根に溜まった水を集め、地上へと導く「雨樋」。

ごく当たり前のように「在る」ことに慣れていらつしやる方も多いかと思いますが、木の葉等による雨樋の詰まりを防ぐため、また意匠的に、雨樋自体を無くしてしまう場合もあります。

そんなときに必要となるのが、写真下段の、「雨落ち」です。

雨樋が無ければお掃除もいらないですし、楽ですが、軒先から土が剥き出しの地面へ雨の滴が落ちたのでは、穴が穿たれたり、ぬかるんだり…という状況を生んでしまいます。

そうならないよう小石などを敷き詰め、そこで雨を受けるようにするのが、「雨落ち」の役割なのです。

この「雨落ち」、数寄屋風住宅の軒先、瓦屋根をすっきりと見せるのにも有効なデザインで、庭のデザインの一部としても優れています。

ただ、「じゃあ、玄関先はどうするの？いくら傘を差しているたつて、通る度に雨がじゃぶじゃぶ落ちてくるんじゃないか、不便だわ。」と思う方もいるはず。

それを解決するために使われるのが、写真上段の、樋の形です。屋根瓦の途中に、樋が作られているのが分かりますか？

この樋で一度雨を受けることで、左右に雨の流れを避けることができ、雨樋が無くとも玄関の出入りに不便のないように、考慮されています。（こちらはお掃除が必要ですが。）

「雨樋の詰まりを防ぐ」という合理性と、デザインとの融合。

こんなところにも、工夫が隠されているのです。

「花の歳時記（6）ボタン」

春爛漫を謳歌したサクラが散ると、万象園は足早に新緑へと衣替えを済ませ、園内はツツジ一色に塗りつぶされます。来園者はツツジに目を奪われ、その反面、華麗・妖艶に咲き乱れているボタン園の方へ足を向ける来客は少ないようです。

ボタン園は邀月橋を南側に渡り、西方に進む遊歩道の南側の芝生広場の西端、瀟洒な和風の休憩所（代笠亭）の北側に隣接しています。是非足を運んで下さい。

このボタン園は、明るく開けた緑の芝生の一角に、これまた見事な枝振りの松並木を背景として植栽されており、その抜群の立地条件とそれに恥じない大輪の見事なボタンの花には、つい吾を忘れて立ち尽くすことでしょう。

ボタンは中国原産で花の王様といわれ、百花の王、花神、富貴花の別名を持つ中国を代表する花であります。日本に

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路 坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分



【長岡 公 氏】

昭和 2 年 10 月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校
・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校
・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月 定年退職 香川西高等学校教頭
現 在 (財) 中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」(栗林・玉藻編／中・西讃編)がある。

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

蕪村

ボタンの花が渡来したのは、奈良時代か平安時代であろうと推測されていますが、奈良時代に弘法大師が薬用として唐から持ち帰ったのが始まりである。とする説もあります。

ボタンは漢名の「牡丹」の音読みで、「丹」は赤を、「牡」は雄を意味します。中国では赤い花がボタンの最高級品とされていましたが、ボタンの種を播いたのでは必ずしも親と同じ赤い花は咲きません。そのため「子供の出来ない(すなわち雄の)赤い花」ということで、この名がつけられたと言われています。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（6）

「杜若」



表：淡萌黄／裏：淡紅梅
着用時期は夏。四、五月。
初夏に美しく瑞々しい葉の間から
紅梅色の艶やかな花を咲かせる
杜若を表した色目。
公家女性たちに愛好された。

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

【編集後記】

当社の倉庫の壁には、「堅牢・品格・調和」と書かれています。入社してすぐの頃、「これが当社の社是だ」と上司に教えてもらった言葉です。

当時の私は、経営理念、社是というものは、もつと理想を謳い上げ、夢を熱く語るような華々しい言葉を使ったものだと思い込んでいましたので、この社是は、「なんだか地味だなあ」と感じられました。

ですが年を経てこの言葉を直視したとき、「結局『理想の建築』はこれに尽きるのだ」と感じます。人の命、生活を守るためには堅牢でなければならぬ。住む人、使い手の価値観や美意識を体現し、文化を創るのだから品格がなければならぬ。風景・街並みを作るのだから風土や慣習・環境に調和していなければならぬ。…それが建設業の本質なのですね。

「堅牢・品格・調和」の揃った建物をつくることは、社員全員の義務、誇りでもあります。その社員の皆さまの生活と誇り、幸せを守ること。そして「建築は文化なり」を掲げ社会に貢献すること。シンブルですが、これが当社の「社是」「経営理念」です。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
／宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭